

一緒に引用されれば近い研究、共引用分析 (Co-citation Analysis)

記事のURL

<https://www.gklibrarykor.com/ja/article/10306/>

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

論文を1本読んでいると、末尾の参考文献リストに見覚えのある名前が並んで登場するのをよく目にします。ある研究者が二つの論文を同じ文章の中で一緒に引用したなら、その二つの論文はどこか似た話をしている可能性が高いでしょう。こうした同時の引用が多くの文章で繰り返し現れるなら、偶然と見るのはなおさら難しくなります。この単純な考えを学問の地図を描く方法へと発展させたのが「共引用分析 (Co-citation Analysis)」です。共引用分析とは、二つの文献が他の文献によって一緒に引用された回数を数え、その回数が多いほど二つの文献の主題が近いと判断する引用分析の手法を意味します。本資料では、共引用分析が登場した背景と基本原理、似た手法である書誌結合との違い、著者分析と近接度分析へと広がった活用、そして解釈するときに注意すべき点まで順に見ていきます。一緒に呼ばれる論文が教えてくれる学問の構造 共引用分析が生まれるまで 引用を通じて文献同士の関係を読み取ろうとする試みは、1960年代から本格的に始まりました。引用索引がつくられ、誰が誰を引用したのかを大量に調べられるようになったおかげです。(1) ケスラーの書誌結合1963年、アメリカ・MITのケスラー (M. M. Kessler) は、二つの論文が同じ文献と一緒に参照していれば互いに関連があるとみなす書誌結合の概念を発表しました。文献の類似